

研究発表

**社会科学の哲学における自然主義論争を治める
——Steel による再図式化の批判的検討を通して**

清水 雄也（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

自然主義論争は、社会科学の哲学における中心課題の1つである。一方に自然主義を、他方に解釈主義を置くこの論争は、伝統的に社会科学と自然科学との関係をめぐるとして図式化されてきた。この図式によれば、自然主義とは「社会科学は自然科学の方法を模倣すべきである」という立場であり、これに対し、反自然主義としての解釈主義は「社会科学は自然科学を模倣する必要はなく、またそもそもそのような模倣は不可能である」とする立場である。

Daniel Steel は、近年の論文「自然主義と啓蒙主義的精神」（2010）において、上述の伝統的図式化

を批判し、別の枠組みによって自然主義論争を捉えることを提案している。Steelによれば、伝統的図式化は自然科学の方法論的統一性を暗黙裡に前提としているが、実際には、自然科学の個別領域は個別の規則群によって方法論的に統制されており、自然科学全般に共通する統一かつ具体的な規則群を同定することは困難である。また、仮に自然科学の全個別領域が受け容れている最小限の規則群を抽出したとしても、それは解釈主義者も同じように受け容れるであろうものであり、それによって自然主義と解釈主義の対立を適切に特徴づけることはできない。

そこで、Steelは「啓蒙主義的精神(the Enlightenment ideal)」(EI)と彼が呼ぶ概念によって自然主義論争を再図式化することを提案する。EIは、密接に結びついた2つの理念から構成されている。1つは「社会科学によって社会現象間の因果関係に関する一般化可能な知識を獲得することができる」という記述的理念であり、もう1つは「社会科学は社会を改良するために役立つ知識を生産するべきである」という規範的理念である。規範的理念の可能性は記述的理念によって担保され、記述的理念の価値は規範的理念によって担保される。そして、この新しい図式によれば、自然主義者とはEIの保持者のことであり、解釈主義者とはEIを拒否する者のことである。Steelは、この図式化の妥当性を文献研究によって示した上で、その利点として(1)自然主義論争の実際の対立点を際立たせられること、(2)社会法則の発見可能性といった脱線的論点を回避できること、(3)社会科学における当該論争を他の科学哲学的論点に接続できることなどを挙げている。

本発表では、Steelによる自然主義論争の再図式化の批判的検討を行い、その代替案を提示する。EIによる自然主義論争の図式化にはいくつかの成果と問題点がある。成果としては、伝統的図式化に潜む暗黙の前提を明示化した上でその無効性を指摘した点、EIによる社会科学観の把握という可能性を示した点などが挙げられる。しかしその図式化は、自然主義と解釈主義との対立の実在性を前提におくことによって形成されたものであり、論争の解消や方法論的結合といった可能性は最初から考慮されていない。本発表では、方法論的対立の前提を精査することで、それが疑似問題である可能性を検討したい。